

33カ国リレー通信



メキシコのユダヤ人

国本 伊代

ディアスポラ（民族の離散）の代表格であるユダヤ人が世界各地で強い相互扶助組織をもち、有能な人材を輩出し、各国の政治と経済に大きな影響力を有していることは広く知られている。メキシコもその例外ではない。

しかし「ユダヤ人とは誰か」という質問に正確に答えることは難しい。メキシコ市内の高級住宅街ポランコ地区で見かける、外見でそれと分かる典型的な保守派ユダヤ人やユダヤ食品店などは少数派の「見えるユダヤ系社会」の存在である。圧倒的多数のユダヤ系メキシコ人は「見えざるユダヤ人」だ。ユダヤ系メキシコ人の見分け方に「ユダヤ人独特の姓」があり、その一覧表もある。しかし世界的に有名な画家ディエゴ・リベラを代表とする数々の著名人がユダヤ系メキシコ人であることを知ると、読者は驚くに違いない。

見えざるユダヤ人系社会の結末

2012年の世界のユダヤ人口統計によると、世界のユダヤ人総数は約1,375万人で、そのうちの43%にあたる590万人がイスラエルに住んでいた。第2のユダヤ人集住国のアメリカ合衆国には40%にあたる543万人が暮らしていた。第14位のユダヤ人居住国メキシ

コのユダヤ人口は約4万人であった。これは世界のユダヤ人口の0.3%に過ぎず、メキシコの総人口1億1,480万人の0.04%未満でしかない。ただしメキシコのユダヤ系社会を統括しているメキシコ＝ユダヤ・コミュニティ中央委員会（CCCJM）はメキシコのユダヤ人口を約7万人（2014年）としている。正確な人口の把握は不可能である。

メキシコのユダヤ人口の60%がメキシコ市とその周辺を含む首都圏に住み、主な地方都市にもユダヤ系社会が存在する。ユダヤ系社会はその祖先の出身地によって信仰・伝統慣習に若干の差異があり、上記のCCCJMは居住都市と出身地別で構成された10のグループの統括本部である。「統括している」という意味は、国内のユダヤ人が巻き込まれた犯罪事件や反ユダヤ運動対策などでメキシコ政府機関と交渉する窓口となり、国外のユダヤ系社会およびイスラエルとの交流・交渉、さらに互助組織の運営などを行っているからである。

近年では非ユダヤ系との結婚も普通で、ユダヤ系社会の2極化が進んでいるとされる。すなわちユダヤ教の信仰と伝統文化を忠実に保守するグループとメキシコ社会にほぼ同化したグループである。

しかし一見メキシコ社会に同化しているかにみえる後者のグループに属するユダヤ系メキシコ人にも、強い「ユダヤ・アイデンティティ」があることも知られている。経済的・社会的成功者が不運な同胞に援助の手を差し伸べ、国内の相互扶助だけでなく、国外の成功したユダヤ系社会からの経済的支援もあり、相対的にみると21世紀のメキシコにおけるユダヤ系社会に貧困層はないように見える。しかしこのユダヤ系社会の30%は生活ギリギリの貧困層であるという指摘があり、恵まれない同胞の老後をみとる無料の老人ホームも存在する。

ユダヤ人のメキシコ移住

ユダヤ人の移住史を詳しく紹介する紙面はないが、その歴史は古い。遡ると1521年にアステカ帝国を征服したエルナン・コルテスが率いた遠征隊にユダヤ人が参加していたことは周知の事実である。1492年にスペインから追放され、逃れた先のポルトガルからさらなる追放で逃亡を余儀なくされたユダヤ人たちの多くが地中海沿岸地方や宗教改革の最中のオランダに逃れる一方で、改宗を受け入れてスペインにとどまったコンベルソまたはマラーノと呼ばれた「改宗

ユダヤ人」の一部も、4世代続くカトリック信徒の家系以外の渡航が禁止されていたアメリカ大陸へ密かに渡航した。しかしメキシコ市は約300年におよぶスペイン植民地統治の中核部で、1571年に設置された異端審問所が「隠れユダヤ人」に目を光らせていたメキシコにコンベルソが潜入するのは決して容易でなかったはずである。

1821年の独立と同時に異端審問所が廃止され、コンベルソの子孫たちはユダヤ教の信仰生活を取り戻したが、信教の自由が確立する1860年までカトリックを国教としていたメキシコへの国外からのユダヤ教徒の移住は難しかった。それでも1825～60年までの間に西ヨーロッパから少数のユダヤ人が渡来した。そして信教の自由が確立した翌61年に、彼らはメキシコ市内に礼拝用の建物を賃借して宗教生活を公に復活させている。1864～67年のマキシミリアン帝政時代にフランス、ベルギー、オーストリア＝ハンガリー帝国からユダヤ人が移住し、19世紀末にシリアからユダヤ人が移住し始め、ポルフィリオ・ディアス時代（1876～1911年）の政治の安定と経済繁栄の下でユダヤ社会が形成された。1910年に勃発したメキシコ革命で多くのユダヤ人がメキシコを去ったが、残留した者たちによって互助組織であるモンテ・シナイ同盟が1912年に結成された。

メキシコに移住したユダヤ人は、セファルディとも呼ばれる東方ユダヤ人（スペインとポルトガルから転住し東欧と地中海沿岸に定住したユダヤ人の子孫）とアシュケナジと呼ばれる西方ユダヤ人（西欧およびポーランド・ロシア＝ソ連邦）に大別されるが、20世

紀初期にメキシコに渡来したのは東方ユダヤ人である。ユダヤ移民を歓迎したオブレゴン大統領（1920～24年）とカリエス大統領（1924～28年）の時代にポーランド、ソ連邦、ドイツなどから約1万人の西方ユダヤ人がメキシコに移住した。彼らはポグロムと呼ばれる虐殺をともなう迫害から逃れてきた比較的教育水準の高い移民であった。東方ユダヤ人が最初のシナゴーク（ユダヤ教の礼拝堂）を造っ

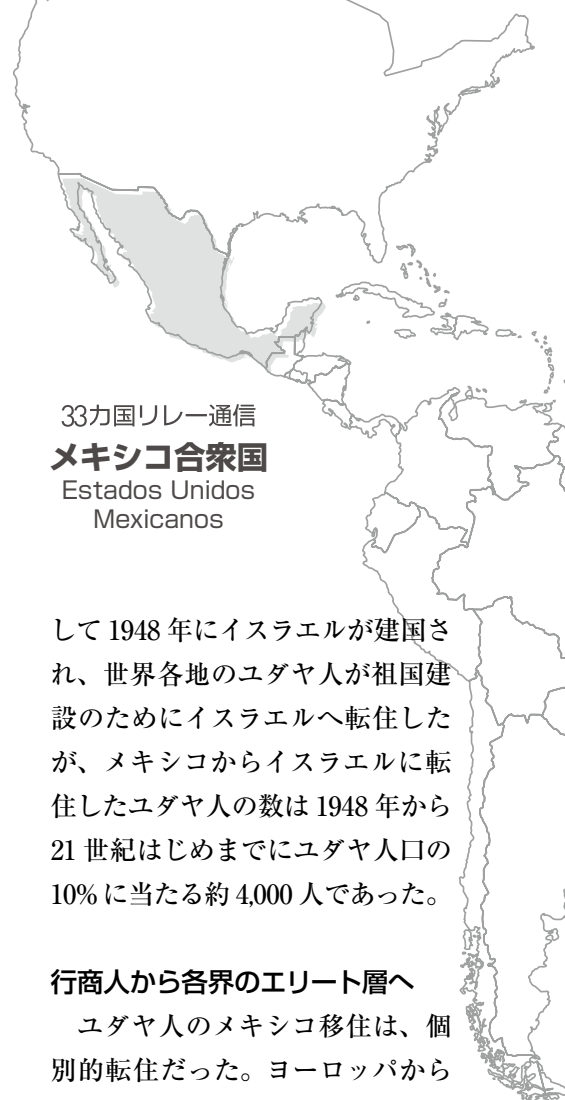


メキシコ市歴史地区のフストシエラ通りにあるシナゴークの外部



同シナゴークの内部

たのは1927年であり、西方ユダヤ人は1941年にシナゴークを造り、メキシコ市内に信仰によって結束したユダヤ系社会が確立した。ナチス・ドイツによる迫害の受難期（1933～45年）にメキシコは難民ユダヤ人に門戸を閉ざしたため、この間にメキシコに入国できた難民ユダヤ人はごく少数である。そ



33カ国リレー通信
メキシコ合衆国
Estados Unidos
Mexicanos

して1948年にイスラエルが建国され、世界各地のユダヤ人が祖国建設のためにイスラエルへ転住したが、メキシコからイスラエルへ転住したユダヤ人の数は1948年から21世紀はじめまでにユダヤ人口の10%に当たる約4,000人であった。

行商人から各界のエリート層へ

ユダヤ人のメキシコ移住は、個別的転住だった。ヨーロッパからベラクルス港へ上陸した者の多くがベラクルス市、首都メキシコ市、プエブラ市、グアダハラ市、そして北部のモンテレイ市などすでにユダヤ住民のいる都市で生活をはじめた。迫害を逃れて移住してきた貧しい移民の多くは、現在ユネスコの世界遺産に登録されている首都の旧市街地にある憲法広場の東側と北側の貧民街のベシンダーと呼ばれる長屋に住みついた。各部屋には台所もトイレもなく、共同トイレと共同水道を使い、煮炊きは長屋の通路でするような生活空間である。スペイン語のわからない彼らは靴磨きや路上の売り子として働いた。

しかし、つましい生活と勤勉な仕事ぶりによって彼らはやがて店舗を構える商人となり、子供たちを学校に通わせ、中産階級へと社会上昇を果たした。この移住者たちの子供、すなわち二世は、21世

紀現在ではすでにその多くが他界するか後期高齢者である。最貧層からメキシコの超エリート層に上りつめたユダヤ人二世の中で、メキシコ人なら誰もが知るユダヤ系メキシコ人ハコボ・サブルドブスキーを紹介しよう。

ポーランドのユダヤ人迫害から逃れてメキシコに移住したサブルドブスキー家の三男として、ハコボは1928年にメキシコ市で生まれた。一家がベシンダーを転々と引っ越して暮らす中でハコボは成長し、当時旧市街地にあった名門高等予備校へ進学し、この学生時代の16歳からラジオ局や新聞社で記者としては働きはじめ、18歳の時

に友人たちとメキシコ・イスラエル文化研究所を創設したことから、早熟で頭脳明晰な青年であったことは確かであろう。テレビ時代の草分けから報道番組に関わり続けた。筆者が知っているのは、メキシコの最有力テレビ局テレビサのニュースキャスターとして毎日顔をみた「著名人ハコボ・サブルドブスキー」である。ダンディーで、わかり易いニュース解説と語り口が魅力であった。テレビサのニュース番組を2000年に降りてラジオ番組に移ってからはその姿をメディアでみる機会は激減したが、2014年の時点でも現役で活躍し、70年以上におよぶジャーナリ

ストとしてのハコボ・サブルドブスキーはユダヤ系メキシコ人であることに誇りとアイデンティティを持ち、ジャーナリズム界の巨匠であり続けている。

このハコボ・サブルドブスキーに代表される20世紀前半に迫害から逃れてメキシコに移住したユダヤ人の2世が実業家、医師、弁護士、会計士、建築家、芸術家、研究者として活躍し、現在では一流の教育を受けたその孫たちが各界へ羽ばたいている。

(くにもと いよ 中央大学名誉教授)

ラテンアメリカ参考図書案内



『黄金の馬 パナマ地峡鉄道 —大西洋と太平洋を結んだ男たちの物語—』

ファン・ダヴィ・モルガン 中川 晋訳 三冬社
2014年11月 565頁 2,000円+税)

2014年に開通100周年を迎えたパナマ運河は、現在その拡張工事が進行中であり、来年初め頃には完工するといわれているが、それ以前に南米南端のマゼラン海峡回りの船で行われていた南北アメリカ大陸の東・西海岸の連絡を短縮するためにパナマ地峡横断鉄道が建設され、運河建設のための輸送に貢献し、今なお旅客・観光用に利用されている。実はこの鉄道建設は、1849年のカリフォルニアで起こったゴールドラッシュにより、多くの一攫千金を夢見る人々が米国東部から西部へと殺到したことが契機となっている。1869年に最初の北米大陸横断鉄道が開通し、この鉄道の利用者は激減することになるが、1880年にスエズ運河を実現させたフランス人レセップスがパナマ運河工事を開始、そしてその挫折後に米国がコロンビア領であったパナマ地峡地帯を独立させ1904年から運河工事を開始したことにより、その重要な資材・人員の輸送路として活躍したのである。

本書は、パナマ人弁護士がこの鉄道建設の秘話を長編小説にしたものである。1850年に着工し猖獗の地で5年の歳月をかけておびただしい犠牲者を出して横断鉄道が完成した影に、いち早くビジネスチャンスに着目した米国の実業家、パナマ東西の港へ運航する船の船員、建設工事のために様々な国から来た技師や労働者達、現地で彼らを受け入れた住民がいて、彼らが遭遇した冒険、悲劇、裏切り、友情と恋などを、またカリフォルニアに向かう山師的男達や工事関係者の爆発的な到来により大きく変貌するパナマ市の姿をも描いており、工事の進展と米国とパナマの街の舞台転換、人間模様が交差して一気に読ませる。

(桜井 敏浩)